

1 単元目標

乗法の意味について理解し、それを用いることができる。

2 指導上の工夫（視点）

（1）単元計画の見直し

活用する知識・技能等を指導案の中に記載し、単元全体を見通しながら活用力を高めるための課題をどう位置付けていくかを意識しながら単元計画を立てた。本時に関連する既習事項を明らかにしていくことは、系統的に学習活動を組み立てていく手がかりにもなった。

かけ算の導入の本時では、1年生の「ひとまとまりの数とまとまりの数からものの総数を求める」という学習が活用すべき既習事項であることから、同じ数のまとまりに着目させながら「1つ分の数」を理解させていくことにした。

（2）課題提示の工夫

① 導入の工夫

既習事項である「同じ数ずつ」のまとまりを「1つ分」とみる見方を大切にさせたいと考え、整列した人とばらばらの人の絵を見せながら「何人いるかな？」と問いかけるところから授業をスタートさせた。両方の並び方を比べさせながら、同じ数ずつ並んでいると数が数えやすいことをとらえさせた後、本時の課題である「1台に4人ずつをさがそう」を提示した。学年2クラスの本校では、クラスごとに整列するという場面は日常的によくある場面であるため、並び方や数え方の違いについて児童は活発に発言していた。

本時では「1つ分の大きさ」（基準量）についての十分な理解を図るため、児童の興味を引くよう、遊園地の乗り物の絵を利用した。教師用は、掛図で提示し、児童一人一人には教科書に差し込みでついていた遊園地の絵だけを切り離して与えるようにした。

② 問題提示の工夫

児童がより意欲的にかけ算の意味やかけ算の式についての理解を深めることができるように、単元後半の身の回りの生活の中から乗法が用いられる場面を見つける授業では、児童の生活場面に即した問題を考えさせた。その際、題意を正確につかませるために、「**お**たずね、**す**数字（数量）、**ず**図、**し**式、**こ**答え」に分けて、一文一文をしっかりと読ませる工夫をしてきた。ノートにもきちんと明示して書くよう指導してきた。

さらに、児童が興味を引くようなキャラメルやチョコレートなどの具体物を用意し、おはじきやマグネット玉などの半具体物や絵や図に置き換えさせながら「1つ分」についての理解の定着を図ってきた。問題提示→具体物→半具体物→抽象化（式化）への流れを念頭におき、問題把握のために有効な算数的活動を取り入れながら授業を組み立てていった。

（3）表現力の育成

① 「聞き上手・話し上手」を育てる取組

昨年までの研究を引き継ぎ、今年度も教室前面に「聞き上手・話し上手」を育てるスキル表を提示し、発表ルール徹底を図ってきた。「聞き上手・話し上手」を育てるためには何より温かい学級集団づくりが大切であることから、失敗をおそれず挑戦し、たとえ失敗したとしてもお互いの失敗を許し合う温かい人間関係づくりをめざして取り組んできた。

国語科を中心とした「話す・聞く」の単元の学習により、児童はペア学習やグループ学習の経験をつみ、全体の間でもあまり抵抗なく話し合い活動ができるようになってきている。

そこで、算数の授業においては、「はじめに」「つぎに」「さいごに」などの順序を表す言葉

や、「そのわけは～だからです。」など、考えの根拠を示す言葉を意識的に使って話すよう指導している。算数的用語を適切に使い、自分の言葉で自分の考えを相手に説明できるよう、算数的コミュニケーション能力の育成を図っているところである。

② ノート指導の工夫

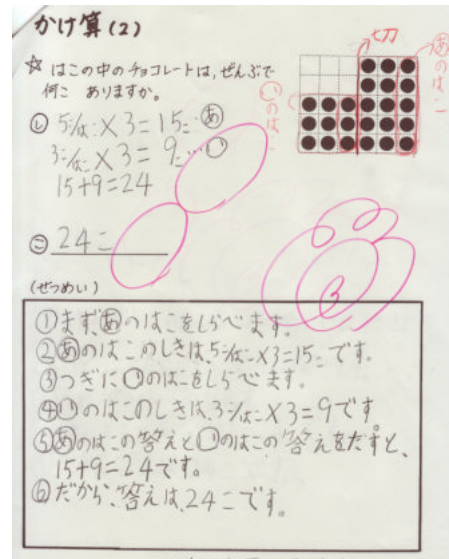
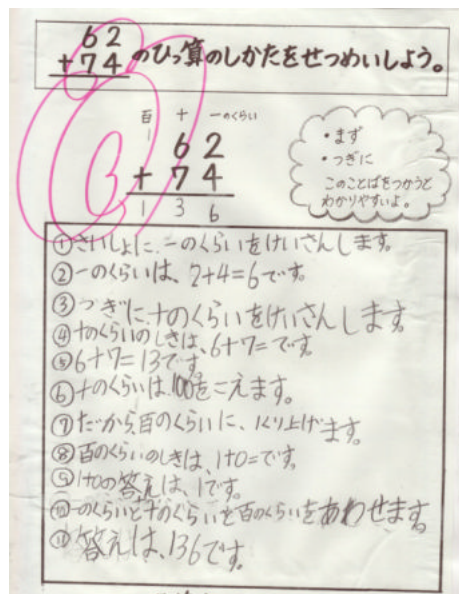
授業の中に「書く活動」を意識的に入れながら、児童の思考の流れがわかるノート指導を工夫してきた。

2学期の「たし算とひき算のひっ算」の単元では、自分が考えた計算のしかたを「みんなに説明することを意識しながら順序よく書いてまとめる活動」を取り入れた。その際、「いくつの文で説明できるかな。」と問いかけ、一文ずつに番号をつけさせて説明を書かせることにした。最初は、児童の説明を教師が一文ずつ板書し、みんなで話し合いながらキーワードに線を引いたり、よけいな言葉を消したりして書き方のポイントをまとめていった。一文ずつ順序よく書くよう指導した結果、どんなふうにかければよいのかわからず最初のうちは、なかなか書き出せなかった児童も友だちの発表がヒントになり、だんだん自分なりの文章で説明が書けるようになってきた。

さらに、自分の考えを一度ノートにまとめたことが自信となつて、その後の学び合いの場面でも児童は積極的に説明することができていた。

乗法九九を総合的に活用して問題を解く場面でも、児童は、図に線や言葉を書き込みながら自分が考えた式を友だちに説明しようとして一生懸命取り組んでいた。

1つの考え方がまとめられた児童には、別の考え方はないかと問いかけいろいろな方法を考えさせたが、どの子も意欲的に取り組んでいた。



(4) 基礎学力定着のための日常的取組

① チャレンジタイムの活用

本校では、月・水・金曜日の掃除の後の帯タイム（チャレンジタイム）を利用し、主に四則計算を中心に6年間で身につけるべき基礎的・基本的学習内容を盛り込んだプリントを用意し、基礎学力の定着を図っている。

2年生は、1年生の内容からスタートしたが、プリントができたなら解答を見て自分で○つけをし、間違えたら再チャレンジしながら次のステップに進んでいけるため、どの子も意欲的に取り組んでいる。

② 家庭学習習慣化の取組

昨年度から全校あげて「10分×学年」を合言葉に家庭学習習慣化への働きかけをしてきた。年度当初に、自学メニューの例を盛り込んだ「家庭学習の手引き」を各家庭に配布し、学習面だけではなく、生活面からも学習に取り組みやすい環境づくりを保護者をお願いしてきた。

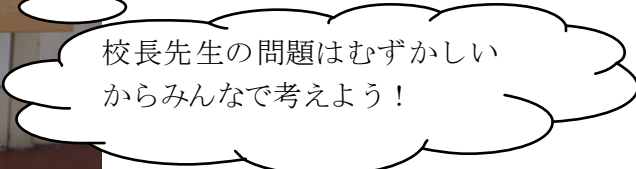
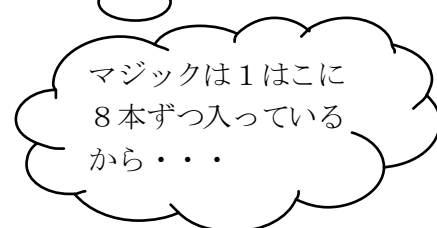
2年生では宿題の内容を工夫することで、学級全体として最低20分の家庭学習はほぼ達成できているが、自学ノートにまで取り組んでいる児童は、まだ半数程度である。友だちの

ノートを参考に見せたり，自学ノートが1冊終わるごとに校長先生から表彰状がもらえることなどを話したりしながら，自ら学ぼうという意欲が高まるよう励ましているところである。

③ 算数的環境づくり

今年度から，各学年の発達段階に合わせて，数量感覚が養えるような算数コーナーを設置することにした。

2年生では，本単元の学習に合わせて，かけ算コーナーを設け，実際の日常生活における乗法の適用場面に目を向けさせたいと考えた。2年ホールの掲示板を使って教師が意識的に校内の乗法適用場面に目を向けさせる仕掛けたことで，子どもたちの側からも次々と同じ数のまとまりを見つけ，乗法が適用できることを確かめていた。



【校長先生からのおもしろ問題】
(校長室前の掲示板)